

# 下月隈鳥越遺跡

—第1次・2次・3次調査報告—

## 水町古墳

—第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第755集

2003年

福岡市教育委員会

# 下月隈鳥越遺跡

—第1次・2次・3次調査報告—

## 水町古墳

—第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第755集



調査番号 9755 9756 9849 0054  
遺跡略号 MIM-1 STO-1 STO-2 STO-3

2003年

福岡市教育委員会



(1) 水町古墳全景（東から）



(2) 水町古墳小石室遺物出土状況（南西から）

## 序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では、開発事業に伴いやむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は福岡空港東側整備事業に伴い調査を実施した下月隈鳥越遺跡第1・2・3次発掘調査および水町古墳第1次発掘調査の報告書です。今回の調査においても多くの貴重な成果を上げることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財についてご理解をいただき費用負担等のご協力をいただいた国土交通省九州地方整備局をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 生田征生

## 例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が福岡空港東側平行誘導路拡張整備事業に伴い、福岡市博多区大字下月隈地内において実施した下月隈鳥越遺跡第1・2・3次調査および水町古墳第1次調査の報告書である。
2. 本書で報告する調査の細目は以下のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
9755	MIM-1	190m <sup>2</sup>	1997.12.8～1998.3.6
9756	STO-1	350m <sup>2</sup>	1997.12.8～1998.3.6
9849	STO-2	226m <sup>2</sup>	1999.1.6～1.29
0054	STO-3	480m <sup>2</sup>	2000.12.1～2001.1.31

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は榎本義嗣、上角智希が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は榎本、上角が行った。
5. 本書に掲載した遺構写真は榎本、上角が撮影した。
6. 本書に掲載した遺物写真は平川敬治が撮影した。
7. 本書に掲載した挿図の製図は榎本、上角、久家春美、上田龍児、濱石正子、撫養久美子が行った。
8. 本書で用いる方位は磁北である。
9. 遺構の呼称は掘立柱建物をSB、溝をSD、ピットをSPと略号化した。
10. 遺物掲載番号は、章ごとに通し番号を付けた。
11. 本書にかかわる図面、写真、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
12. 本書の執筆はI、II、IVを榎本が、IIIを上角が担当し、編集は上角が行った。

# 本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
1) 下月隈鳥越遺跡第1次調査、水町古墳第1次調査	1
2) 下月隈鳥越遺跡第2次調査	2
3) 下月隈鳥越遺跡第3次調査	3
II. 遺跡の立地と環境	3
III. 下月隈鳥越遺跡第1次・2次・3次調査の記録	7
1. 調査の概要	7
2. 遺構と遺物	9
1) 溝(SD)	9
2) 掘立柱建物(SB)	13
3) その他の遺物	13
3. 結語	14
IV. 水町古墳第1次調査の記録	15
1. 位置と現状	15
2. 墳丘	15
1) 地山成形	15
2) 墳丘	15
3. 埋葬施設	18
1) 横穴式石室	18
2) 小石室	18
4. 出土遺物	20
5. 結語	22

# 挿 図 目 次

第1図	下月隈鳥越遺跡・水町古墳位置図(1/25,000)	4
第2図	下月隈鳥越遺跡・水町古墳周辺の古地図(1/5,000)	5
第3図	下月隈鳥越遺跡・水町古墳の各調査区的位置(1/1,000)	6
第4図	下月隈鳥越遺跡Ⅲ区 地形測量図(1/250)	7
第5図	下月隈鳥越遺跡Ⅲ区 南壁七層図(1/80)	8
第6図	下月隈鳥越遺跡 溝上層図(1/40)	10
第7図	下月隈鳥越遺跡 SD02出土遺物実測図(19は1/4、ほかは1/3)	11
第8図	下月隈鳥越遺跡 SB10および出土遺物実測図(1/60、1/3)	12
第9図	下月隈鳥越遺跡 その他の出土遺物実測図(29、30は2/3、ほかは1/3)	13

第10図	現況測量図 (1/150)	折込み
第11図	墳丘遺存状況測量図 (1/150)	15
第12図	地山成形状況測量図および石室俯瞰図 (1/100)	16
第13図	墳丘十層断面図 (1/60)	17
第14図	墳丘A群遺物出土状況実測図 (1/20)	18
第15図	横穴式石室実測図 (1/40)	19
第16図	小石室実測図 (1/40)	20
第17図	出土遺物実測図 (1) (1/1、1/3、1/4、1/6)	21
第18図	出土遺物実測図 (2) (1/5)	22
付 図	下川隈鳥越遺跡第1次・2次・3次調査 遺構配置図 (1/250)	

## 目 次

第1表	検出した溝の遺構番号対応表	7
-----	---------------	---

## 図 版 目 次

巻頭図版	(1) 水町古墳全景 (東から)	(2) 水町古墳小石室遺物出土状況 (南西から)
図 版1	(1) 調査地点全体 (北から)	(2) I区全景 (北から)
図 版2	(1) III区全景 (西から)	(2) II区全景 (北から)
図 版3	(1) I区 SB10 (北から)	(2) I区 左からSD02、05 (南から)
	(3) I区 SD02土層 (南から)	(4) II区 左からSD02、03 (南から)
	(5) II区 左からSD04、07、08、09 (南から)	
	(6) II区 左からSD09・08、07、04 (北から)	
図 版4	(1) III区全景 (北から)	(2) III区全景 (東から)
	(3) III区溝検出状況 (南から)	(4) III区 左からSD01、02、04 (南から)
	(5) III区 左からSD05、04、02、01 (北から)	
	(6) III区 SD01須恵器坏蓋出土状況	
図 版5	(1) 調査前状況 (南から)	(2) 伐採後状況 (東から)
	(3) 墳丘遺存状況 (東から)	(4) 墳丘A群遺物出土状況 (北西から)
	(5) 横穴式石室 (南東から)	(6) 横穴式石室奥壁 (南東から)
図 版6	(1) 横穴式石室左側壁 (北東から)	(2) 横穴式石室右側壁 (南から)
	(3) 小石室 (南西から)	(4) 小石室 (北西から)
	(5) 小石室 (北東から)	(6) 小石室 (南東から)
図 版7	(1) 小石室遺物出土状況 (南西から)	(2) 墳丘Aトレンチ十層 (南から)
	(3) 墳丘Bトレンチ土層 (北西から)	(4) 墳丘Cトレンチ土層 (東から)
	(5) 横穴式石室掘り方 (南東から)	(6) 地山成形状況 (北西から)
図 版8	水町古墳出土遺物	

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

運輸省第四港湾建設局博多港湾空港工事事務所長（現 国土交通省九州地方整備局博多港湾空港工事事務所）より平成7（1995）年8月21日付、四港建博第402号により同市教育委員会教育長宛てに博多区下月隈地内における福岡空港東側平行誘導路拡張整備事業（事業面積：約3ha）に伴う埋蔵文化財事前審査についての依頼が行われた（事前審査番号：7-1-622）。

同事業は、福岡空港南側からの大型機離陸時における安全運行や運行効率の向上化等のため、滑走路に平行する様に東側誘導路を直線化整備するものである。また、空港用地外との緩衝地域を拡充し、飛行機排気ガスの外部への影響を軽減する目的も含まれている。なお、平成13年度から工事着工し、平成15年1月から供用が開始された。

教育委員会埋蔵文化財課では、上記の事前審査依頼を受け、事業地内南側に水町古墳が占地していることや事業面積が広範なことから試掘調査を実施することとした。その調査は用地公有化の進捗状況に合わせ、平成8年3月12日・13日、同年4月9日・10日および平成10年1月28日に行った。試掘調査の結果、今回報告する下月隈鳥越遺跡第1次・2次・3次調査地点において、溝を主体とする遺構が確認できた。当該地は、未周知の埋蔵文化財包蔵地であったことから、大字名と小字名を組み合わせた「下月隈鳥越遺跡（遺跡登録番号：2778）」として新たに登録した。なお、水町古墳の周辺についても周溝確認の目的で試掘トレンチを設定したが、削平が著しく遺構は検出できなかった。

この試掘結果をもとに内者は、当該地の埋蔵文化財保存を前提とした協議を行ったが、事業計画上、遺構の破壊が回避できないことが判明したため、平成9年度に下月隈鳥越遺跡第1次調査、水町古墳第1次調査、平成10年度に同遺跡第2次調査、平成12年度に同遺跡第3次調査を行った。また、資料整理・調査報告書作成は平成14年度に行うこととした。なお、これらの発掘調査ならびに資料整理等に係る費用は事業主体である運輸省第四港湾建設局および国土交通省九州地方整備局が負担した。

## 2. 調査の組織

### 1) 下月隈鳥越遺跡第1次調査、水町古墳第1次調査

調査委託：運輸省第四港湾建設局

整理委託：国土交通省九州地方整備局

調査主体：福岡市教育委員会 文化財部埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課長 荒巻輝勝（前任） 山崎純男（現任）

同課第2係長 山口諒治（前任） 田中壽夫（現任 現 調査第2係長）

調査庶務：同課第1係 河野淳美（前任）

文化財整備課 御手洗浩（現任）

調査担当：同課第2係 榎本義嗣（現 同部文化財整備課整備係）

調査作業：佐佐木 金子國雄 熊本義徳 小林義徳 坂田武 渋谷博之 関哲也 米倉國弘  
石橋テル子 金子澄子 唐島栄子 酒井康恵 杉村百合子 辻美佐江 水松伊都子  
永松トミ子 日比野典子 吉田恭子  
稲田健二（福岡大学学生）

整理作業：西島信枝 松尾真澄

## 2) 下月隈鳥越遺跡第2次調査

調査委託：運輸省第四港湾建設局

整理委託：国土交通省九州地方整備局

調査主体：福岡市教育委員会 文化財部埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課長 柳田純孝（前任） 山崎純男（現任）

同課調査第2係長 山口譲治（前任） 山中壽夫（現任）

調査庶務：文化財整備課 谷口真由美（前任） 御手洗清（現任）

調査担当：同課調査第2係 榎本義嗣（現 同部文化財整備課整備係）

調査作業：一ノ瀬周三郎 岩佐亘 金子國雄 熊本義徳 小林義徳 坂田武 渋谷博之 関哲也

永松好伸 米倉國弘 石橋テル子 金子澄子 唐島栄子 酒井康恵 杉村百合子

辻美佐江 永松伊都子 永松トミ子

整理作業：西島信枝 松尾真澄

## 3) 下月隈鳥越遺跡第3次調査

調査委託：運輸省第四港湾建設局

整理委託：国土交通省九州地方整備局

調査主体：福岡市教育委員会 文化財部埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課長 山崎純男

同課調査第2係長 方武卓治（前任） 田中壽夫（現任）

調査庶務：文化財整備課 御手洗清

調査担当：同課調査第2係 上角智希

調査作業：浅井伸一、池田省三、井上住子、梅野真澄、甲斐正耕、木田ひろ子、児島勇次、

相良謙一、辻節子、筒井唯義、徳永洋二郎、徳山孝恵、鳥井原良治、中村桂子、

島中千恵美、濱フミ子、平山栄一郎、前山勉、的場淑子、三谷朗子、吉田勝善、

吉田一寛、吉田恭子、吉田米男

整理作業：久家春美、篠原明美、黒柳恵美、鈴木美保子

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで運輸省第四港湾建設局をはじめとし、同省大阪航空局ならびに国土交通省九州地方整備局等の関係者の皆様方には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

## II. 遺跡の立地と環境

玄界灘に北面し、背後に背振・三郡山系をひかえる福岡市には、これより派生する山塊、丘陵によって画される中小の平野が展開しており、東側から粕屋、福岡、早良、今宿平野と呼称される。いずれの各平野も古くから独自の歴史的、地理的環境を有している。今回報告する下月隈鳥越遺跡・水町古墳の位置する福岡平野の西側には背振山系に属する油山(標高:597m)から北側に発達する丘陵が派生し、早良平野と画される。また、東側には一郡山地より派生した大城山(標高:410m)の山麓から北西方向に月隈丘陵が延びて、粕屋平野との境界をなしている。両遺跡は平野東側に位置するこの月隈丘陵の西側に立地している。なお、東西の両丘陵間には御笠川、那珂川が博多湾へと北流し、沖積地が形成されるが、平野内には洪積台地が点在している。

両遺跡周辺は空港整備や宅地化により地形の大規模な改変が進んでいるが、第2図に示す占地図や里道の状況、調査時の所見等から旧来は、月隈丘陵から西側へ派生する支丘が鞍部を挟み、尾根線の向きを変えながら北西方向へ延びて、沖積地へと至っていたものと推定される。よって、下月隈鳥越遺跡は支丘の西側緩斜面およびその西側に形成された沖積地に立地し、また、水町古墳は舌状の支丘陵部に占地していたものと推測される。

この月隈丘陵上には多数の遺跡が知られている。旧石器時代、縄文時代については遺物が散見される程度であるが、弥生時代の生活遺構としては前期の貯蔵穴が影ヶ浦遺跡群、宝満尾遺跡で検出されている。中期から後期にかけての遺構の増加が目立ち、久保園遺跡、席田大谷遺跡群(赤穂ノ浦遺跡)、中尾遺跡群等で集落が確認されている。久保園遺跡では中期後半に比定される5×8間の大形掘立柱建物が発見されており、該地における樞軸的な集落であったと考えられる。また、赤穂ノ浦遺跡出土の横帯文銅鐙型や席田大谷遺跡群出土の石製銅戈鋳型模造品は青銅器生産に関する集団の存在を示唆するものであろう。また、墓地も中期から後期にかけて増加し、金隈遺跡、上月隈遺跡群、下月隈B遺跡群(下月隈宮ノ後遺跡)、宝満尾遺跡等で甕棺墓、上城墓からなる墓域が形成される。上月隈遺跡群では中期後半の甕棺墓に中細形銅剣1口、ガラス製管玉20数点が、宝満尾遺跡では後期前半の上城墓に異体字銘帯鏡1面が副葬されており、有力者層の存在が看取される。

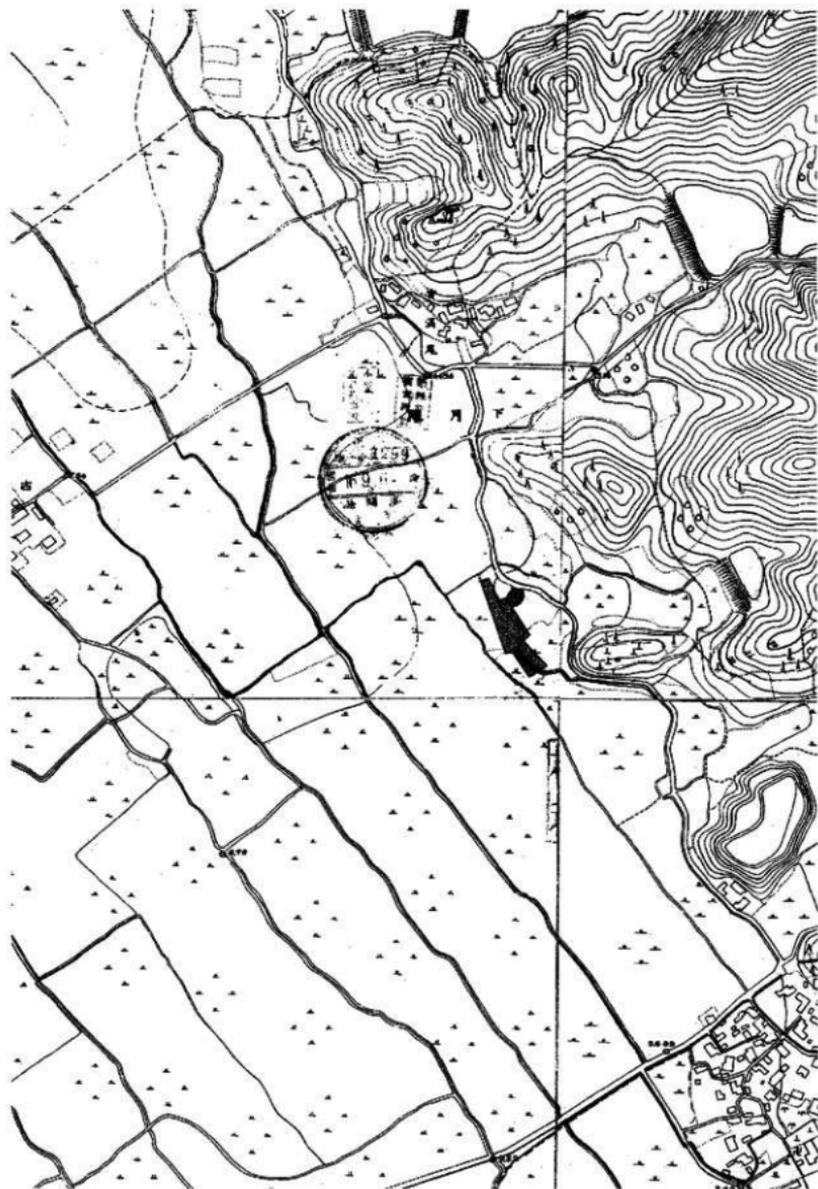
古墳時代では堅穴住居が散見されるが、墓地としての利用が主体を占め、5世紀後半から6世紀前半にかけて新立表古墳群、貝花尾古墳群、宝満尾古墳、天神森古墳群、丸尾古墳群、席田大谷古墳群等の尾根上に1〜数基の小群からなる古墳が造営される。貝花尾古墳1号墳、丸尾1号墳では堅穴系横口式石室が採用されている。また、新立表古墳2号墳や宝満尾古墳では屍床を有する横穴式石室が構築されている。なお、丘陵南側では堤ヶ浦古墳群、持田ヶ浦古墳、影ヶ浦古墳群の大規模な後期群集墳が形成されている。また、巨石を石室に用いた後期の円墳として今里不動古墳が知られる。

古代から中世にかけての遺構は少数であるが、立花寺遺跡群では古代の倉庫群の他、初期輸入磁器や瓦が出土しており、官衙の可能性を有する。天神森遺跡群では支丘間の谷部を利用して、14世紀から15世紀にかけての集落が営まれる。また、久保園遺跡の丘陵上では11世紀後半から12世紀後半の埋葬遺構が検出されている。また、中世末には立花城の端城である稲居塚城が築城されており、関連遺構が上月隈遺跡群で検出されている。

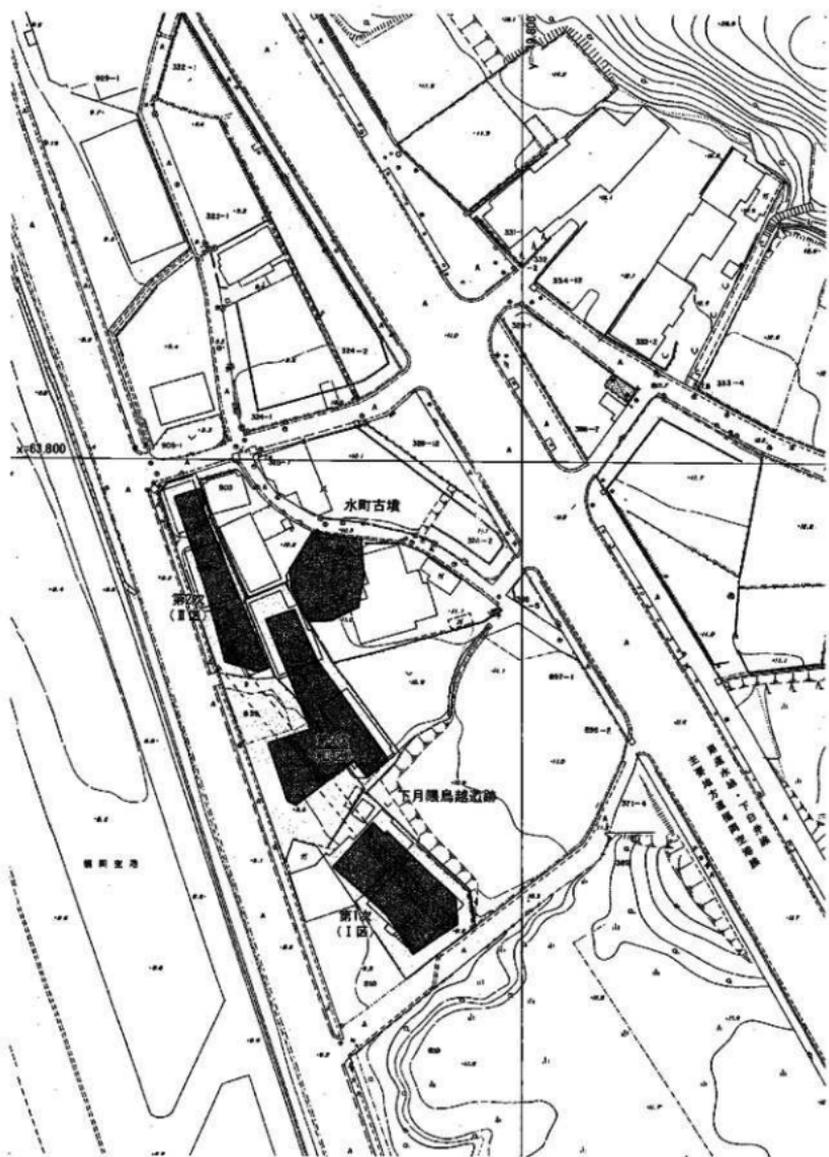
これら月隈丘陵の西側に面する沖積地においては雀居遺跡、下月隈C遺跡群、立花寺B遺跡群等で調査が行われており、沖積微高地上に営まれた弥生時代から中世の集落や低地を利用した水田遺構の様相が明確になりつつある。今後は丘陵部および沖積地それぞれに展開する遺跡群相互の関連性を考慮する必要があろう。



第1圖 下月隈鳥越遺跡・水町古墳位置圖 (1/25,000)



第2図 下月限島越遺跡・水町古墳周辺の古地図 (1 / 5,000)



第3図 下月隈鳥越道跡・水町古墳の各調査区的位置 (1/1,000)

# 下月隈鳥越遺跡

—第1次・2次・3次調査報告—

### Ⅲ. 下月隈鳥越遺跡第1次・2次・3次調査の記録

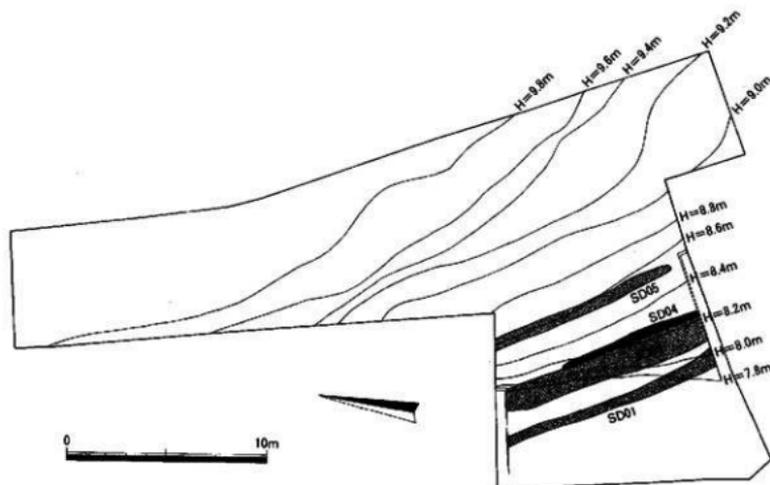
#### 1. 調査の概要

下月隈鳥越遺跡は博多区大字下月隈地内に所在する。福岡平野東側の月隈丘陵から北西に派生する舌状支丘の端部に立地しており、調査区のすぐ北東側に水町古墳がある。調査前は宅地であった。福岡空港東側整備に伴う調査であるが、用地買収の都合上、3度に分けて調査を実施した。1997年度に南側（第1次調査）、1998年度に北側（第2次調査）、2000年度にその中間地点（第3次調査）を実施している。連続する区域の調査であり遺構が複数の調査区にまたがって検出されていることもある。したがって、本報告は第1・2・3次調査分をまとめて説明を行う。それに伴い、遺構番号を新たに設定し、遺物も調査区ごとでなく遺構ごとにまとめ連番を付した。各調査で付した遺構番号と本報告での遺構番号の対応関係は第1表のとおりである。また、本報告では第1次調査区をⅠ区、第2次調査区をⅡ区、第3次調査区をⅢ区と呼ぶことにする。

第1表 検出した溝の遺構番号対応表

本報告の遺構番号	SD01	SD02	SD03	SD04	SD05	SD06	SD07	SD08	SD09
第1次調査（Ⅰ区）			001		002	003			
第2次調査（Ⅱ区）		025	026	021			022	023	024
第3次調査（Ⅲ区）	01	02	05	04	03				
溝底面の標高 (m)	7.5	7.5	※8.0	8.3	8.4	8.5	9.0	9.1	9.2

※Ⅱ区で7.5m、Ⅲ区で8.4m



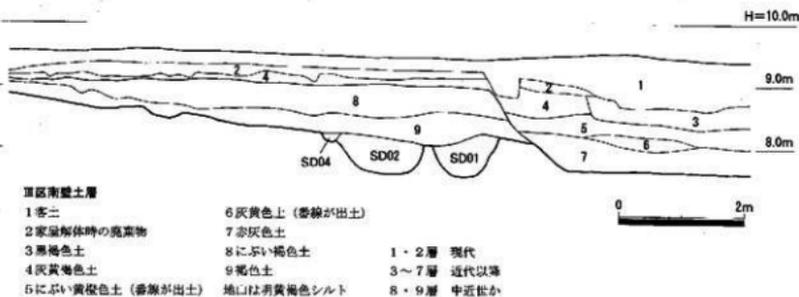
第4図 下月隈鳥越遺跡Ⅲ区 地形測量図（1/250）

下月隈鳥越遺跡は福岡平野東側の月隈丘陵端部に位置するため、遺構検出面は西側の低平地に向かってかなりの勾配で傾斜している。後述する遺構の性格の検討において、この地形が意味を持っているので、地形についてやや詳しく述べておきたい。

第4図は中央部にあたるⅢ区の地形実測図である。また、第5図はⅢ区南壁土層図である。Ⅲ区は逆L字形をなすが、西側の突出部が斜面になっており、最も低い西端部が標高7.6mを測り、東側に向かって急勾配で上がっていく。東端部は標高9.8mで調査区北側にかけて平坦部が存在する。遺構が調査区南西部の斜面でしか検出されないことから、東側については旧地形が削平されている可能性もある。溝は自然地形に沿ってほぼ標高が等しい部分を通るようにつくられている。

第5図に示すとおり、調査区の西側は近代以降に深く掘り込まれ地山のシルトも少し削られている。

その下の第8、9層には層序の乱れはなく、少量だけ出土した遺物から中近世の地積である可能性が高い。しかし、本調査区では中近世の遺構はもちろん、遺物もほとんど出土しないことから、その頃は集落ではなく耕作地であった可能性が高い。Ⅰ、Ⅱ区についても、Ⅲ区ほど極端ではないが、やはり遺構検出面は西側の低平地に向かって傾斜している。



第5図 下月隈鳥越遺跡Ⅲ区 南壁土層図 (1/80)

今回の調査では、丘陵端部を平行して走る溝群と掘立柱建物1棟、欵状遺構、ピットを検出した。溝は調査区間での対立関係がいまひとつはっきりしないが8、9本が重複しつつ検出されている。溝の軸方向は西側の平野部に戦前までよく残っていた条里区割とほぼ等しい。遺物がほとんど出土しない溝が大半であるが、SD01から7世紀中頃の須恵器杯蓋が、SD02からは7世紀末から8世紀中頃にかけての須恵器、土師器が一定数まとまって出土した。また、Ⅰ区ではこれらの溝に直交する溝3条を検出した。南側のⅠ区で検出した掘立柱建物SB10は主軸方向を溝SD02と同一にし、その西側に隣接する。一部は調査区外に出るが、梁間2間(柱間2m)以上、桁行3間(柱間2.5m)の規模である。やはり8世紀の遺構である。

出土遺物は少なく、コンテナ5箱分にとどまる。7世紀中頃から8世紀中頃にかけての須恵器・土師器のほかに、中世前期の貿易陶磁器、弥生時代の土器・黒曜石も少量出土している。

3. 総語で後述するが、溝SD02およびSD01は条里地割に関わる遺構と考えられる。

## 2. 遺構と遺物

### 1) 溝 (SD)

今回の調査では磁北から約20°～40°西偏する方位に軸を取る溝が一部重複しながら8、9本ほど検出された。調査区間に空隙部が存在するため、各調査区で検出した溝の対応関係は必ずしも明確ではなく、その検討には困難が伴った。今回仮に9本の溝として報告するが、まずその推定根拠を示しておく。最初に注目したのはSD02である。各調査区で良好に遺存しており、ほぼ直線上に位置すること、断面形態、埋土が類似することからSD02の対応関係は確実である。残りの溝については、やや蛇行するためまっすぐ直線上にのらず、出土遺物もほとんどなく遺物の年代から対応関係を探ることも無理であった。そこで溝の底面のレベルに注目してみた。すでに対応関係が明らかなSD02についてみると、北から順にⅠ区で標高7.5m、Ⅲ区で7.6m、Ⅱ区で7.6mを測り、溝の底面高はほぼ等しい。地形が斜面であるものの、SD02を参考にすればそれと平行する各溝の底面高はやはりほぼ一定になると考えてよいだろう。溝の底面高は7.5m付近、8.4m付近、9.1m付近の3群に分かれる。この底面高および溝同士の切り合いをもとに対応関係を推定したのがSD03、04、05である。他の溝についてはⅠ区とⅢ区のもので対応する可能性も否定しないが根拠薄弱のため保留して9本とした。また、Ⅰ区では上述の溝に直交する浅い溝3条(SD11～13)を検出した。

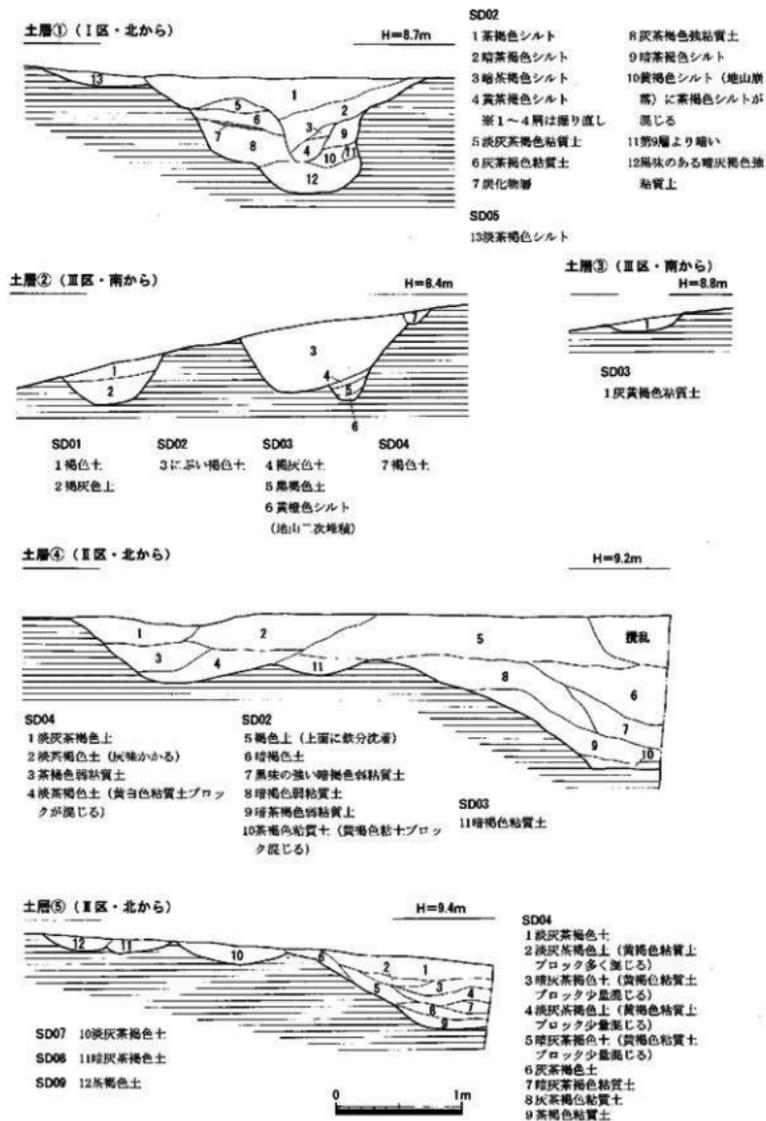
全体的に遺物が少ない。SD02でまとまった数の遺物が出土したほかは、SD01出土の須恵器坏蓋があるのみである。よって、この2条の溝以外については時期を特定できない。

**SD01 (第6図)** Ⅱ区で検出した溝で、最も西側に位置する。断面逆台形で検出面での幅80cm、深さ40cmを測る。須恵器坏蓋の完形品が出土した。検出面からかなり下げた段階、確実に埋土内から出土している。出土遺物は非常に少なく、ほかは小片ばかりである。

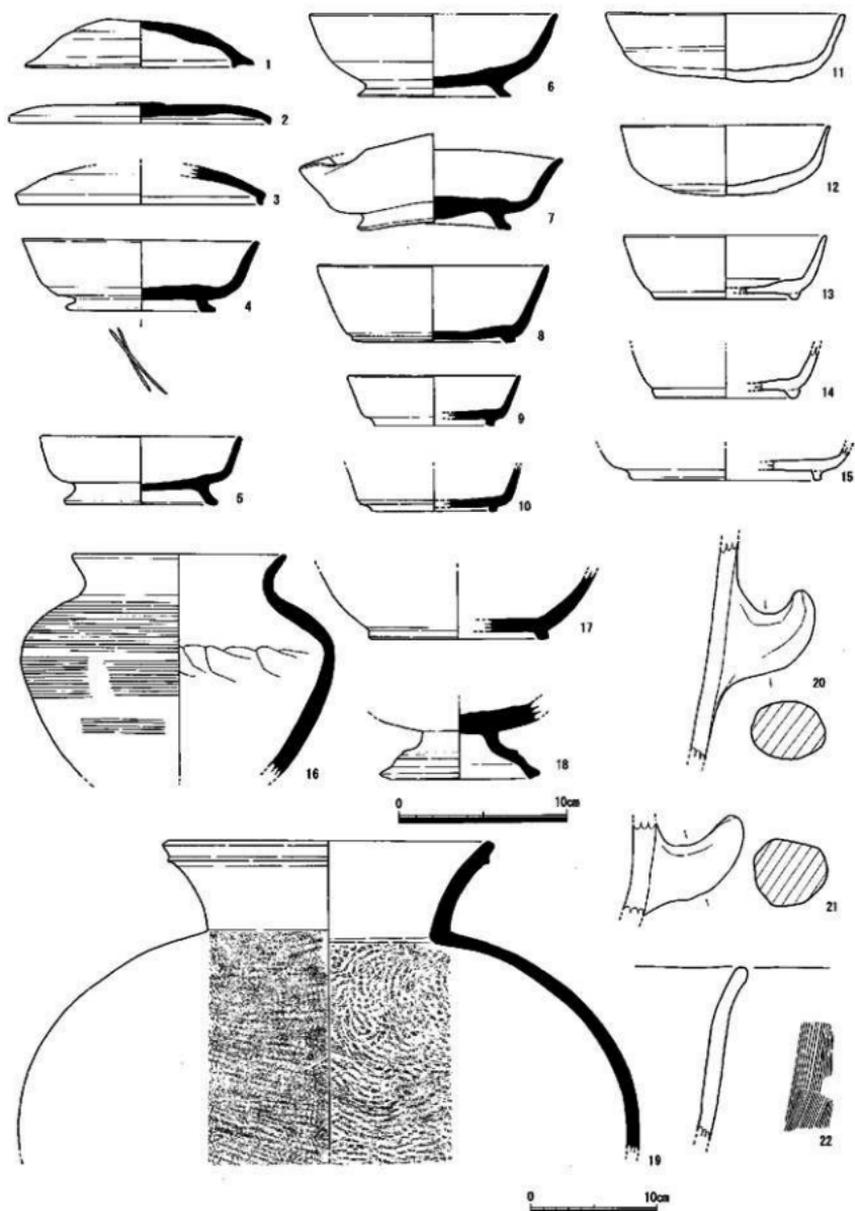
出土遺物(第9図) 26は須恵器の坏蓋である。口径は小さく、天井部に擬宝珠形の摘みがつく。返りは退化している。完形品で口径9.6cm、器高3.0cmを測る。7世紀中頃に位置づけられる。

**SD02 (第6図)** Ⅰ区～Ⅲ区にかけて検出した。遺存状態がよく、とくにⅠ区では遺物がまとまって出土した。断面逆台形でⅠ区土層では溝の掘り直しが確認できる。出土遺物は複数型式にわたる時期のものが混じっており、長期間溝が利用されていたと考えられる。遺物は7世紀末から8世紀中頃にかけてのものである。

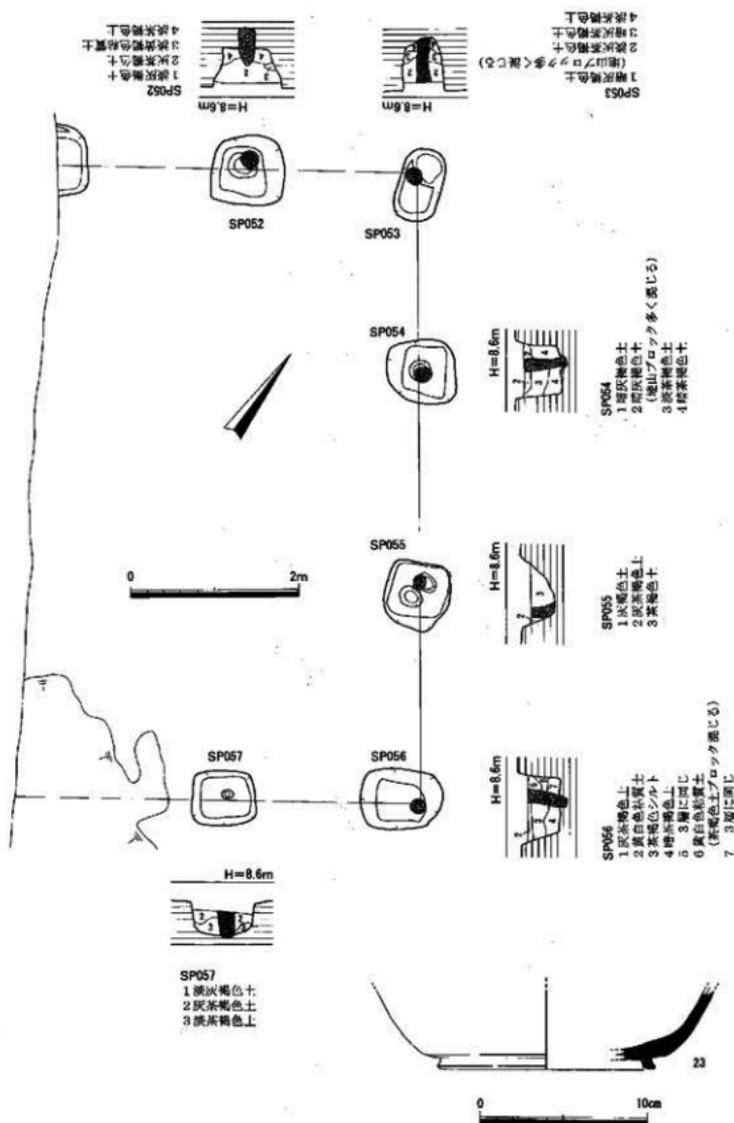
出土遺物(第7図) 1～3は須恵器の坏蓋である。1は退化した返りをもち、天井部は回転ヘラ切り後ナデ調整し、摘みはつかない。完形品で口径13.4cm、器高2.9cmを測る。2は扁平で口縁部は断面三角形をなす。ボタン状の摘みがつく。3はやや丸みを帯び、口縁部は下に折れる。4～10は須恵器の坏である。4～7は高台が外に踏ん張るタイプである。4は底面にヘラ記号を記す。口径13.8cm、器高4.2cm、底径8.8cmを測る。5は口径12.0cm、器高4.1cm、底径9.0cm。6は底部がやや丸みを帯び、完形品で口径14.6cm、器高4.9cm、底径9.0cmを測る。色調は灰黄色で一見土師器のようだが製作技法から須恵器とした。7はひどく歪んでいるが、ほぼ完形し平均値で口径15.5cm、器高5.3cm、底径9.0cmを測る。8～10は高台が断面四角形のタイプである。8は口径13.6cm、器高4.6cm、底径9.6cmを測る。11～15は土師器の坏である。11、12は高台がつかないタイプで底部は回転ヘラ切り。13～15は高台を貼り付けるタイプである。16～19は須恵器である。16は短頸壺で口径12.6cm、頸部径11.0cm、胴部最大径18.2cmを測る。外面上半にカキ目を施し、内面最大径部に指頭による接合痕を認める。17は有高台の壺である。18は高坏の脚部である。短脚で底部内側に接地する。19は大型の壺である。体部は外面に格子目叩き、内面に同心円文の当て具痕が残る。口



第6図 下月隈鳥越遺跡 溝土層図 (1/40)



第7図 下月隈鳥越遺跡 SDO2出土遺物実測図 (19は1/4、ほかは1/3)



第8図 下月隈鳥越遺跡 SB10および出土遺物実測図 (1/60, 1/3)

縁部で1/4、胴部で1/2が残存し、復元口径26.0cm、胴部最大径48.6cmを測る。20～22は土師器の甎である。20、21は牛角状の把手、22は口縁部である。

SD03(第6図) II、III区で検出した。この溝は底山高がII区とIII区で1mほど異なっているが、ほぼ直線上に並び、他の遺構との切り合い関係に矛盾がないことから同じ溝と判断した。

SD04(第6図) II、III区で検出した。II、III区で検出した。II区では底部がかろうじて遺存するのみである。III区では良好に遺存し幅2.4m、深さ60cmを測る。SD02を切る。

SD05(第6図) I区、II区で検出した。底がかろうじて残る。SD02に切られる。

SD06(第6図) I区で検出した溝で、底のみ残る。

SD07(第6図) III区で検出した。底面の標高は9.0mを測り、SD08を切り、SD04に切られる。

SD08(第6図) III区で検出した。SD07、09に切られる。

SD09(第6図) III区で検出した最も東側の溝である。

SD11以下の3条はI区で検出され、SD02と直交する。これらの溝はSD02に切られる。

SD11 旧番号はSD005。最も南側の溝である。幅80cm、深さ30cmを測る。

SD12 旧番号はSD006。SD11の7m北側で検出した。幅1m、深さ10cmを測る。

SD13 旧番号はSD007。I区の北端で検出した。幅50cm、深さ5cmを測る。

## 2) 掘立柱建物(SB)

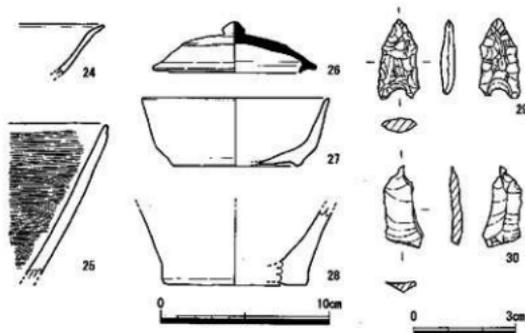
SB10(第8図) I区で検出した。一部は調査区外に延び、梁間2間(柱間2m)以上、桁行3間(柱間2.5m)の規模である。主軸方向は溝SD02とほぼ一致し磁北から35°西偏する。柱穴は隅丸方形で、柱痕ははっきりとはしないが検出面から一段下げた深さで検出できた。旧番号はSB004。

出土遺物 第8図23は須恵器の坏である。高台は断面四角形で外側がやや突き出る。出土遺物より、この遺構の年代は8世紀前半～中頃に位置づけられる。

## 3) その他の遺物

今回の調査で検出した遺構は古代に位置づけられるが、これらの遺構に混入して弥生時代および中世の遺物が若干出土している。

第9図24は口禿の白磁碗Ⅹ類の口縁部である。13世紀後半～14世紀前半。25は土製鍋で中世のもの。26はすでに報告したがSD01出土の須恵器坏蓋である。27は土師器の坏である。28は弥生土器の甕あるいは甕の底部である。29、30は腰岳系の黒曜石である。29は五角形の石鏃、30は剥片である。



第9図 下川隈島越遺跡 その他の出土遺物実測図  
(29、30は2/3、ほかは1/3)

### 3. 結 語

今回の月隈鳥越遺跡第1・2・3次調査では、丘陵端部をN-20~40°-Wの方向に平行して走る溝8、9条とそれに直交する浅い溝3条、掘立柱建物1棟、畝状遺構、ピットを検出した。遺物がほとんど出土しない遺構が大半であるが、SD01から7世紀中頃の須恵器坏蓋が、SD02からは7世紀末から8世紀中頃にかけての須恵器、土師器が一定数まとまって出土した。南側の1区で検出した掘立柱建物SB10は主軸方向を溝SD02と同一にし、その西側に隣接する。一部は調査区外に出るが、梁間2間(柱間2m)以上、桁行3間(柱間2.5m)の規模である。やはり8世紀の遺構である。出土遺物は少なく、コンテナ5箱分にとどまる。7世紀中頃から8世紀中頃にかけての須恵器・土師器のほかに、中世前期の貿易陶磁器、弥生時代の土器・黒曜石も少量出土している。

今回の調査で注目されるのは丘陵端部を南東から北西に縦断する溝である。これらの溝は磁北から20~40°西偏しており、良好に遺存するSD02の主軸方向はN-35°-Wで、調査地点の西側に広がる裾岡平野に戦前まで残っていた水田の条里地割(N-37°-W)とほぼ一致している。これらの溝と条里地割の関係についてわずかであるが検討することにした。

本調査区を含む月隈周辺の一带は古代には御笠郡に属し、福岡条里区と呼ばれる条里地割が復元されている(H野尚志1976『筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について』『佐賀大学教育学部研究論文集』第24集I)。H野氏の論考によれば、福岡条里区は旧提原川の右岸から那珂川流域を経て席田郡、粕屋郡、御笠郡にかけて展開している。土地割の方位はN-37°-Wで、この方位は天智天皇三年(664年)に築かれた水城の方位と直交する。

本地区における条里制の施行時期の詳細については明らかでないが、水城の築造から程なく施行されたとするのが定説のようである。仮に670年頃として、考察を進めよう。SD02号溝は遺存状態がよく遺物がまとまって出土している。出土須恵器は複数型式のものが混ざっており、土層観察においても溝の掘り直しが認められることから、SD02は比較的長い期間使用され続けている。須恵器の年代観については研究者間でやや違いがあるが、7世紀末から8世紀中頃の時期をあてておく。では溝の開削時期はいつか。調査区では溝以外の遺構は少なく、溝より高い部分を調査したⅢ区では後世の削平の可能性を残しつつも遺構はまったく検出されていない。よって丘陵上からの土器の流れ込みはひとまず考えずともよさそうである。したがって、古い型式の7世紀末頃をSD02の開削時期と考えたい。とすれば、条里制の施行時期ともほぼ一致する。

次に、SD02の西隣で検出したSD01号溝であるが、7世紀前半~中頃の須恵器坏蓋の完形品が出土している。他には出土遺物がなく1点だけで時期を比定することは危険であるが、7世紀前半では水城築造よりも先行することになる。しかし、小型で擬宝珠柄をもつこの種の坏蓋は後の時期まで残るようなので7世紀後半~末にあってもおかしくはないであろう。やや問題を残すが、SD01の開削時期も水城築造(664年)より後と考えるとよかろう。他の溝については遺物が出土していないので時期不明である。

以上のように、SD02、01の開削時期を水城築造直後と考え、これらの溝を条里地割と関連付けることは可能であろう。もちろん溝が自然地形に沿ってつくられていることも事実であり、方位の一致は偶然である可能性もある。が、それならばなぜ同じ位置に多くの溝が重複して掘られているのか、新たな疑問が生じてくる。

今後の須恵器実年代論の展開や周辺の調査事例による追証が必要であるが、現段階では主軸方位が条里地割とほぼ一致するSD02およびSD01を条里地割に伴う遺構と考えたい。

# 水町古墳

—第1次調査報告—



第10图 现状测量图 (1/150)

## IV. 水町古墳第1次調査の記録

### 1. 位置と現状 (第3・10図)

水町古墳は月隈丘陵から北西に派生する標高約12mの支丘先端部に単独に立地する古墳であるが、古墳周辺は宅地造成により旧地形が著しく失われている。また、雑木が繁茂した墳丘も削平により平面楕円形状を呈する。現況では周辺の平地からの比高差約4mで、墳丘上面の標高は14.4mを測る。墳丘南東側には大振りな石材が露出しており、その前面には小規模なブロック積みの祠が設置されていた。その石材が横穴式石室の一部であることは予想できたが、石室の前面を閉鎖する様に石材が崩落し、石室内も埋没していたため、調査が進行するまで石室の開口方向や形態は不明であった。また、樹木伐採後には墳丘北西側に「南無阿弥陀仏」銘の板碑1基が確認できた。

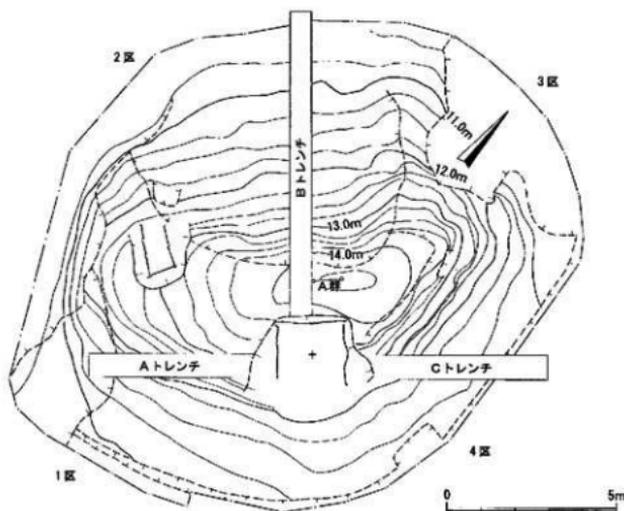
### 2. 墳丘

#### 1) 地山成形 (第12図)

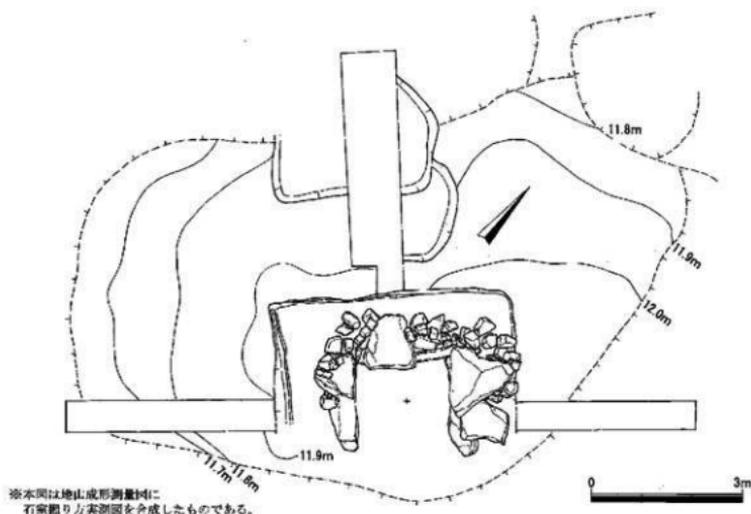
墳裾部は大きく削平されており、周溝は遺存していない。また、「I. - 1. 調査に至る経緯」で前述した様に、古墳周辺に設置した試掘トレンチにおいても確認できていない。したがって、地山成形は墳丘基底面の整地の一部を確認し得たのみである。その整地作業では、古墳の占地する支丘派生方向に沿った僅かな緩斜面を残しているが、ほぼ平坦な面を作り出している。なお、第13図の墳丘土層断面図に示すように基底面上には炭化物や焼土を含む薄い層が認められ、整地時の立木の焼却もしくは祭祀的儀礼行為が行われたものと推測される。

#### 2) 墳丘 (第11・13・14図)

墳丘は頂部および1・4区を主体に削平が進んでいる。また、北東部も半円状に削平を受けている。



第11図 墳丘遺存状況測量図 (1/150)



第12図 地山成形状況測量図および石室俯瞰図 (1/100)

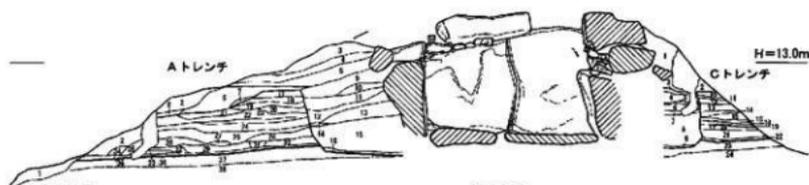
遺存する盛土の形成は大きく3工程に分かれる。まず、基底面から石室掘り方を掘り込むまでの1次盛土、次に石室掘り方内の腰石裏込めのための埋土、そして墳丘形成等が目的の2次盛土(墳丘盛土)である。

1次盛土はA・Cトレンチでは、基底面からの厚さ0.45～0.7mの粘質土を主体とする土が版築状に細かい単位でほぼ水平積み重ねられている。また、Bトレンチでは、A・Cトレンチ同様の水平層(46～48層、52～54層)が認められるものの、その層群を切る断面台形状の掘り込みが認められ、その坑内にも更に土を積み重ねている。土層観察ではまず、52～54層の薄い盛土を行ない、北西部に深さ約0.4mの掘り込みを行なった上で、その内部に50・51層を充填する。次に46～48層の盛土をし、南東部に深さ約0.7mの掘り込みを行う。その坑内には不整合面が認められるものの版築状の細かい盛土(28～45層)を施す。更にその上層から深さ0.45mを掘り込み、再度埋め戻していることが判明した。これら1次盛土上面の標高は12.6～12.8mを測り、ほぼ平坦な面を形成している。これらの地業を行なって上で、石室掘り方を設置している。

この掘り方内は大き目の単位で埋土がなされるが、最下層には薄い黒褐色系の土層が認められ、A・Cトレンチでは炭化物片が含まれていた。掘り方内の埋土は両側壁の腰石が安定するようにその上端まで施され、同時に1次盛土とはほぼ同一レベルに到達している。

2次盛土は石室掘り方を埋めた後、行なわれており、2段目以上の壁体裏込め・天井石被覆および墳丘成形を目的としていと考えられる。石室の上半が失われており、両者の判別は現状では困難であるものの、基本的には石室側から外側に向かって盛土が施されている。ただし、Bトレンチの4・5層は堤状に盛土がなされており、墳丘土流出防止戸の上手の可能性もある。

なお、遺存する墳丘の高さは基底面から約2.2mである。墳径は墳堀および石室の削平により不明

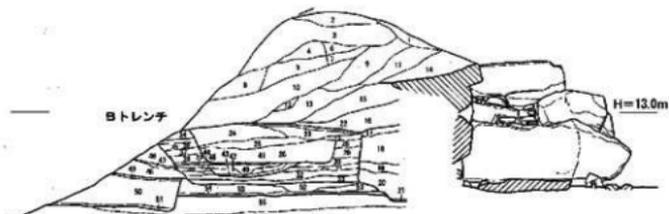


Aトレンチ

- |              |            |             |                |
|--------------|------------|-------------|----------------|
| 1 腐葉土        | 12 赤褐色の粘質土 | 23 赤褐色粘質土   | 36 暗黒褐色土       |
| 2 しごいのない黄褐色土 | 13 11層に同じ  | 24 暗黒茶褐色土   | (灰化物層を含む)      |
| 3 淡黄褐色土      | 14 赤茶褐色土   | 25 赤褐色粘土    | 37 にぶい赤褐色土     |
| 4 赤茶褐色土      | (灰化物土を含む)  | 26 暗赤褐色土    | 38 赤褐色粘質土      |
| 5 淡黄褐色土      | 15 暗赤茶褐色粘土 | 27 淡灰褐色土    |                |
| (赤褐色土+黄褐色)   | 16 黒灰褐色土   | 28 2層に同じ    | 1・2: 黄土        |
| 6 赤褐色土       | (灰化物層を含む)  | 29 淡黄褐色土    | 3~8: 2次盛土(須恵土) |
| 7 淡黄褐色土      | 17 黒褐色土    | 30 2層に同じ    | 9~16: 石室壁り方盛土  |
| 8 黄茶褐色土      | 18 暗赤茶褐色土  | 31 赤褐色粘質土   | 17~26: 1次盛土    |
| 9 赤茶褐色粘質土    | 19 淡灰褐色土   | 32 赤褐色粘土    | 27~28: 地山      |
| 10 赤茶褐色粘質土   | 20 赤褐色粘土   | 33 暗黒褐色土    |                |
| 11 黄褐色土      | 21 20層に同じ  | 34 にぶい赤褐色土  |                |
| (粘質土+フック層?)  | 22 暗赤茶褐色土  | 35 黒色の粘質腐葉土 |                |
| (粘質土+フック層?)  | (土層間のフック層) |             |                |

Cトレンチ

- |           |            |              |
|-----------|------------|--------------|
| 1 赤褐色粘質土  | 11 赤褐色土    | 21 暗黒褐色粘土    |
| 2 赤褐色粘質土  | 12 黒灰褐色粘質土 | 22 赤褐色土      |
| 3 赤褐色土    | 13 暗赤茶褐色土  | 23 赤褐色粘土(含む) |
| 4 赤褐色土    | 14 赤褐色粘土   | 24 赤褐色粘質土    |
| 5 赤褐色土    | 15 赤褐色粘土   | 25 赤褐色粘土     |
| 6 赤褐色土    | 16 赤茶褐色土   | 26 赤褐色粘土     |
| 7 赤褐色土    | 17 黒褐色粘質土  | 27 赤褐色粘土     |
| 8 赤褐色土    | 18 赤褐色土    | 28 赤褐色粘土     |
| 9 赤褐色土    | 19 赤褐色粘土   | 29 赤褐色粘土     |
| 10 赤褐色粘質土 | (灰化物層を含む)  | 30 赤褐色粘土     |
|           |            | 31 赤褐色粘土     |
|           |            | 32 赤褐色粘土     |
|           |            | 33 赤褐色粘土     |
|           |            | 34 赤褐色粘土     |
|           |            | 35 赤褐色粘土     |
|           |            | 36 赤褐色粘土     |
|           |            | 37 赤褐色粘土     |
|           |            | 38 赤褐色粘土     |
|           |            | 39 赤褐色粘土     |
|           |            | 40 赤褐色粘土     |
|           |            | 41 赤褐色粘土     |
|           |            | 42 赤褐色粘土     |
|           |            | 43 赤褐色粘土     |
|           |            | 44 赤褐色粘土     |
|           |            | 45 赤褐色粘土     |
|           |            | 46 赤褐色粘土     |
|           |            | 47 赤褐色粘土     |
|           |            | 48 赤褐色粘土     |
|           |            | 49 赤褐色粘土     |
|           |            | 50 赤褐色粘土     |
|           |            | 51 赤褐色粘土     |
|           |            | 52 赤褐色粘土     |
|           |            | 53 赤褐色粘土     |
|           |            | 54 赤褐色粘土     |
|           |            | 55 赤褐色粘土     |
|           |            | 56 赤褐色粘土     |



Bトレンチ

- |             |             |            |            |          |          |
|-------------|-------------|------------|------------|----------|----------|
| 1 腐葉土       | 11 淡黄茶褐色土   | 21 黒灰褐色土   | (灰化物土+黄褐色) | 31 淡灰褐色土 | 41 黒灰褐色土 |
| 2 黄褐色土      | 12 黄白土      | 22 淡黄褐色土   | 34 淡黒灰褐色土  | 44 赤茶褐色土 | 54 赤茶褐色土 |
| 3 赤茶褐色土     | 13 赤茶褐色土    | 23 赤褐色土    | 35 淡灰褐色土   | 45 赤褐色土  | 55 赤褐色土  |
| 4 淡黄土       | 14 明赤茶褐色土   | 24 淡赤茶褐色土  | 36 赤茶褐色土   | 46 赤褐色土  | 56 赤褐色土  |
| (粘質土+フック層?) | 15 赤褐色土     | 25 黄茶褐色土   | 37 赤茶褐色土   | 47 赤褐色土  | 57 赤褐色土  |
| 5 淡黄土       | (粘質土+フック層?) | 26 赤茶褐色土   | 38 淡灰褐色土   | 48 赤褐色土  | 58 赤褐色土  |
| (粘質土+フック層?) | 16 赤茶褐色土    | 27 黒灰褐色土   | 39 赤褐色土    | 49 赤褐色土  | 59 赤褐色土  |
| 6 淡赤茶褐色土    | 17 赤茶褐色土    | 28 暗赤茶褐色土  | 40 赤褐色土    | 50 赤褐色土  | 60 赤褐色土  |
| 7 淡赤茶褐色土    | 18 黄褐色土     | 29 淡灰褐色土   | 41 黄茶褐色土   | 61 赤褐色土  | 71 赤褐色土  |
| (粘質土+フック層?) | (粘質土+フック層?) | 30 にぶい赤褐色土 | 42 赤褐色土    | 62 赤褐色土  | 72 赤褐色土  |
| 8 にぶい黄褐色土   | 19 淡赤茶褐色土   | 31 淡灰褐色土   | 43 赤褐色土    | 63 赤褐色土  | 73 赤褐色土  |
| 9 黄褐色土      | (粘質土+フック層?) | 32 黄茶褐色土   | 44 にぶい黄褐色土 | 64 赤褐色土  | 74 赤褐色土  |
| 10 5層より赤い   | 20 赤茶褐色土    | 33 黒灰褐色土   | 45 赤褐色土    | 65 赤褐色土  | 75 赤褐色土  |
|             |             |            | 46 赤褐色土    | 66 赤褐色土  | 76 赤褐色土  |
|             |             |            | 47 赤褐色土    | 67 赤褐色土  | 77 赤褐色土  |
|             |             |            | 48 赤褐色土    | 68 赤褐色土  | 78 赤褐色土  |
|             |             |            | 49 赤褐色土    | 69 赤褐色土  | 79 赤褐色土  |
|             |             |            | 50 赤褐色土    | 70 赤褐色土  | 80 赤褐色土  |
|             |             |            | 51 赤褐色土    | 71 赤褐色土  | 81 赤褐色土  |
|             |             |            | 52 赤褐色土    | 72 赤褐色土  | 82 赤褐色土  |
|             |             |            | 53 赤褐色土    | 73 赤褐色土  | 83 赤褐色土  |
|             |             |            | 54 赤褐色土    | 74 赤褐色土  | 84 赤褐色土  |
|             |             |            | 55 赤褐色土    | 75 赤褐色土  | 85 赤褐色土  |
|             |             |            | 56 赤褐色土    | 76 赤褐色土  | 86 赤褐色土  |
|             |             |            | 57 赤褐色土    | 77 赤褐色土  | 87 赤褐色土  |
|             |             |            | 58 赤褐色土    | 78 赤褐色土  | 88 赤褐色土  |
|             |             |            | 59 赤褐色土    | 79 赤褐色土  | 89 赤褐色土  |
|             |             |            | 60 赤褐色土    | 80 赤褐色土  | 90 赤褐色土  |
|             |             |            | 61 赤褐色土    | 81 赤褐色土  | 91 赤褐色土  |
|             |             |            | 62 赤褐色土    | 82 赤褐色土  | 92 赤褐色土  |
|             |             |            | 63 赤褐色土    | 83 赤褐色土  | 93 赤褐色土  |
|             |             |            | 64 赤褐色土    | 84 赤褐色土  | 94 赤褐色土  |
|             |             |            | 65 赤褐色土    | 85 赤褐色土  | 95 赤褐色土  |
|             |             |            | 66 赤褐色土    | 86 赤褐色土  | 96 赤褐色土  |
|             |             |            | 67 赤褐色土    | 87 赤褐色土  | 97 赤褐色土  |
|             |             |            | 68 赤褐色土    | 88 赤褐色土  | 98 赤褐色土  |
|             |             |            | 69 赤褐色土    | 89 赤褐色土  | 99 赤褐色土  |
|             |             |            | 70 赤褐色土    | 90 赤褐色土  | 100 赤褐色土 |

第13図 墳丘土層断面図 (1/60)

であるが、Bトレンチでの墳丘端部から石室端部までの長さは約7m、A-Cトレンチでの両端部の長さは8.5mを測る。

盛上からは墳丘祭祀に伴うと考えられる遺物が出土している。2区では1次盛土中の上層から須恵器甕の底部(第17図3)が、3区2次盛土上層からは須恵器器台および甕口縁部(第11図A群、第14図、第17図1・2・7)が出土した。A群はBトレンチに隣接しており、同トレンチの2層に相当する位置に器台脚端部が据えられた状態で出土し、周辺に脚部の上半および甕片が散在していた。また、約1m離れた位置には同一個体と考えられる台部上半の破片が確認できた。



第14図 墳丘A群遺物出土状況実測図(1/20)

### 3. 埋葬施設

埋葬施設として横穴式石室および小石室を各1基確認した。

#### 1) 横穴式石室(第12・15図)

石室は南東方向に開口し、玄室主軸をS-42°-Eにとる。南東部の大規模な削平により天井石、玄室の南東半部、羨道部および墓道は失われており、遺存状況は不良である。また、調査前は右側壁の一部が露出していたが、他は埋没状態にあった。

石室掘り方は前述したように1次盛土後に掘削が行われている。壁面の傾斜は強く、北東部は垂直に近い。南東部の削平により掘り方の全容は不明であるが、方形プランを呈すると推定され、幅4.8m、深さ約0.7mを測り、長さは2.5mが遺存する。掘り方壁面と腰石との距離は右側壁側がやや狭いものの、左側壁および奥壁側は約1mの間隔をおいている。

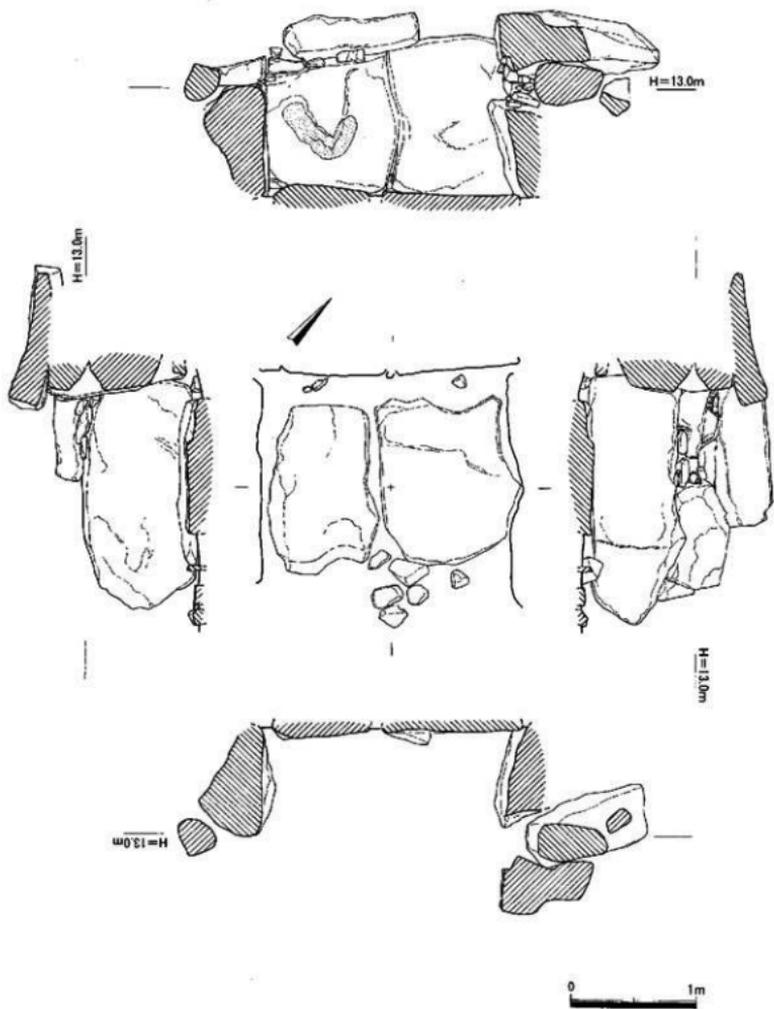
玄室は左右共に側壁腰石1石分しか遺存していない。奥幅は2.0mで、遺存する側壁は右壁長1.9m、左壁長1.65mを測る。石材は全て花崗岩の自然石を用いている。奥壁は腰石に幅1.9m、高さ0.9~1.3m、厚さ0.2~0.3mを測る偏平な台形状の石を据えるが、上圧によるものか、中心部分で縦方向2枚に割れている。なお、奥壁左側の中央部には赤色顔料と推定される塗布物が僅かに遺存していた。腰石の上には小口面を石室内に向け、平坦な石をのせるが、腰石の間には小振りな塊石を積み、安定を図っている。右側壁は腰石に幅2.0m、高さ0.7mの横長の石を据える。2段目の玄門側には幅0.8m、高さ0.4mの転石をのせるが、外側に傾いている。また、奥壁側には小振りな転石や塊石を充填し、2段目の目地を揃えている。奥壁側には3段目が遺存しており、奥行き長い石をのせている。左側壁は腰石に幅1.85m、高さ0.9mを測る横長の板状の石を据え、奥壁側には2段目の石の一部が遺存する。なお、石室掘り方の裏込めとして、人頭大を主体とする塊石が用いられている。

玄室床面には方形の板石2枚が敷かれ、奥壁側と玄門側には小振りな塊石数個が認められた。板石は共に長さ1.35m前後、厚さ0.1~0.2mを測り、幅は右側が広く1.1m、左側が0.95mを測る。なお、玄室内は空掘を受けており、原位置を保つと考えられる副葬遺物は出土しなかった。出土遺物の項で後述するが中世期の青磁碗が出土しており、該期に再利用が図られたものと推測される。

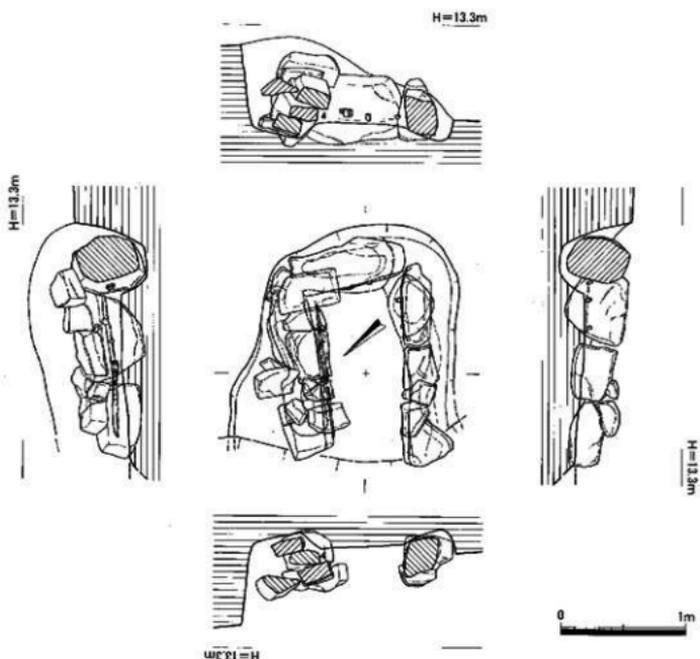
#### 2) 小石室(第16図)

2区において墳丘盛土上面より掘り込まれた竪穴系の小石室を1基検出した。石室の主軸方位はN-48°-Wで、横穴式石室と類似した方位を有する。墳丘の削平に伴い、北西部および天井石は消失していた。

石室の掘り方は現況で不整な隅丸長方形を呈するものと考えられ、幅1.5m、深さ0.7mを測り、長さは1.6mが遺存する。掘り方の壁面側には腰石を据えるために凹凸のある溝状の掘り込みを行う。壁面と腰石の距離は狭く、その埋土は淡黄褐色土ブロックが混じった赤茶褐色土である。



第15図 横穴式石室実測図 (1/40)



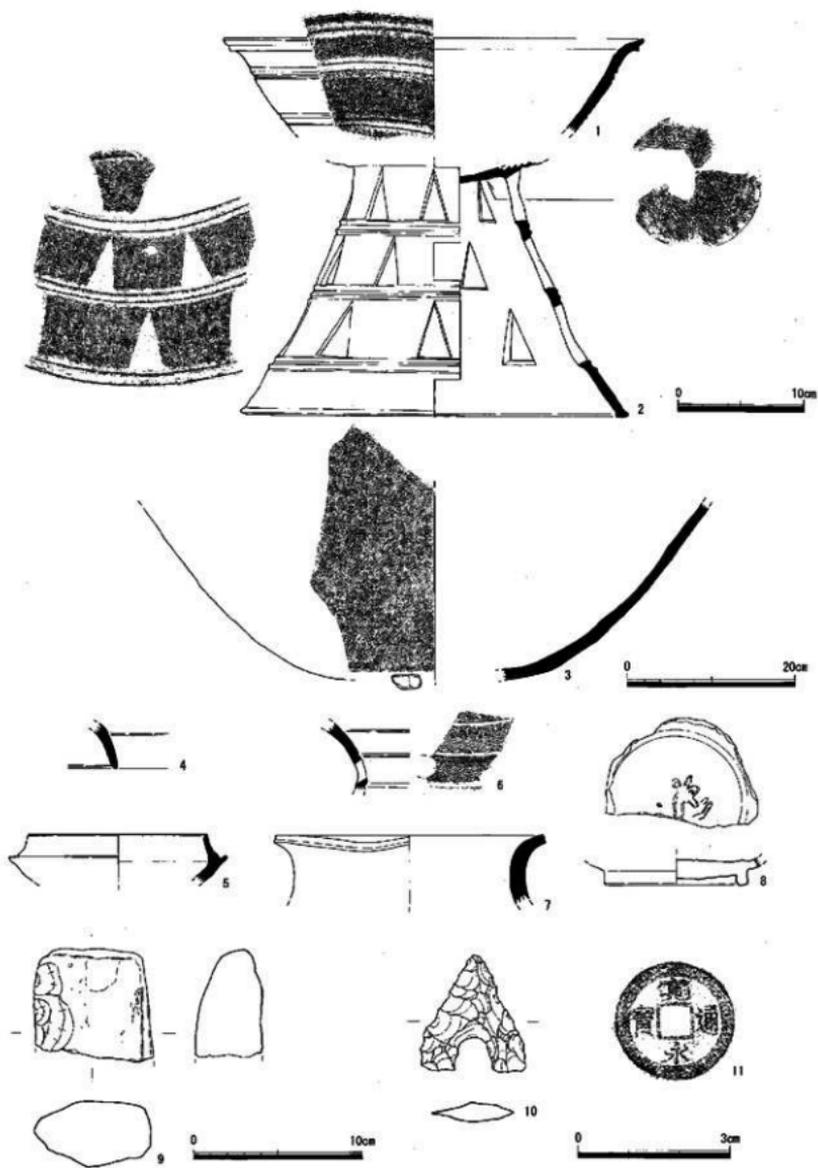
第16図 小石室実測図 (1/40)

石室は削平により北西側が尖われる。また、北東側の側壁は墳丘盛土の上圧により石室内に向かって傾斜している。石材は全て花崗岩の自然石で、南東側の小口幅0.8m、遺存する側壁は北東壁長1.2m、南西壁長1.55mを測る。南東側小口には高さ約0.5mの方形の腰石を1石据える。北東側側壁には上面の高さを揃える様に腰石2石を設置し、2段目にはやや小振りな方形の石をのせる。また、南西側側壁には3石の腰石を据え付け、上端の目地を揃えるために北西側には塊石を積んでいるが、2段目は遺存していない。

石室内には、北東壁に沿う様に刃部を上向きにし、鋒を北西に向けた鉄刀1口およびその刃部中央南西側に密着し、鋒を鉄刀と同方向に向けた鉄鍔20点前後(第18図)が副葬されていた。その下端レベルが床面と考えられ、同一面上には小櫛が少数認められた。また、鉄鍔はその出土状況から10点前後単位で2列に並べ置かれていたものと推測される。

#### 4. 出土遺物 (第17・18図)

1・2は前述した墳丘A群出土の須臾器器台で、出土状況や色調等から同一個体と考えられる。1は台部の上半片で、復元口径33.0cmを測る。口縁部は外反し、口縁下および体部外面には鈍い断面三角形の凸線を巡らせる。その間には櫛状工具による波状文が上段には1単位、中段には2単位が

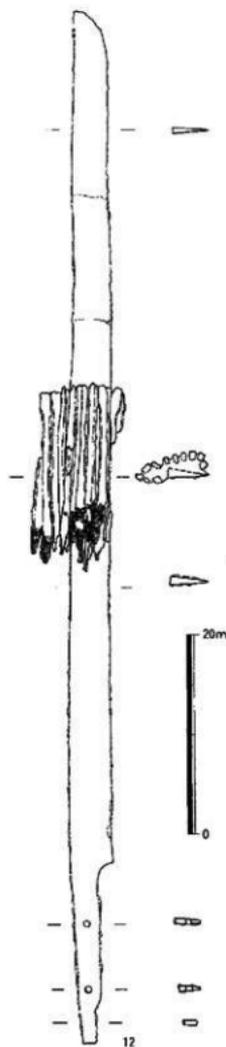


第17图 出土遺物実測図(1) (1・2は1/4、3は1/6、10・11は1/1、他は1/3)

認められる。下段にも一部が遺存するが単位は不明である。内面にはヨコナデを加えている。2は台部下端および脚部である。台部の内面には不明瞭ながら青海波状の当て具痕が認められ、外面には平行叩きを施すが、ナデを加えている。脚部は「ハ」字状に大きく外反し、端部は平坦で、内面に鈍く突出する。外面は2条単位の凸線により4段に区分され、最下段を除く上位3段には台部同様の波状文が各3単位施される。また、三角形のスカシ窓が下鳥状に推定で各8個切り込まれる。底径は30.6cm、全器高は推定で30.3cmを測る。3は前述した2区1次盛上土層出土の須恵器大甕の底部である。外面は平行叩きを施し、ナデを加え、内面は板状工具による擦過が認められる。下端には焼台と推定される礎が付着する。4・5は玄室内出土の須恵器である。4は坏蓋の細片で、天井部と口縁部の境界には鈍い沈線を配する。口縁部内面の端部には段状の沈線が巡る。5は坏身で、立ち上がりは内傾し、復元径は10.4cmを測る。6は表土出土の須恵器磁片である。円形孔の一部が遺存し、外面には柳状工具による波状文を有する。7は前述した墳丘A群出土の須恵器甕の口縁部である。外反する口縁端部は面を形成する。8は玄室内出土の明代龍泉窯系青磁碗で、外底部は輪状に軸をカキ取る。見込みには不鮮明な花文のスタンプを有する。9・10は玄室内出土の石器で、9は玄武岩製磨製石斧の基部、10は黒曜石製石鏃である。11は表土出土の銅銭「寛永通寶」である。12は小石室出土の平造り鉄刀(直刀)および鑄着した鉄鏃である。鉄刀は全長104.3cm、刀身長86.0cm、茎長18.3cm、身幅3.8cm、脊厚1.0cmを測る。茎は撫角片間で、隅抉尻の形態を呈する。また、径0.6cmの目釘穴を2箇所に有する。鉄鏃は関の不明瞭な長茎鏃で、全長約15.5~19cmを測る。茎には木質や桜皮が遺存しており、筈被の形態は不明瞭である。鏃身は幅1cm前後で、両丸造りである。鑄着した鉄鏃は18点であるが、他に破損品が数点ある。

## 5. 結語

本古墳の築造時期は、墳丘盛土中から出土した須恵器器台から類推することが可能で、その浅い台部や長脚化しきっていない脚部等の形態的特徴から5世紀後半の時期を与えることができる。また、細片であるものの横穴式石室出土の須恵器蓋坏から少なくとも6世紀後半代まで追跡が行なわれていたものと推定される。小石室出土の築造時期は、出土鉄刀や鉄鏃の形態から古墳築造時期とほぼ同時期と考えられ、古墳築造からあまり時間を置かずに築かれている。本古墳は、その単独立地や墳丘形成の手法、出土器台等から御笠川東岸における当該期の首長墓の一つとして位置付けられよう。



第18図 出土遺物実測図(2)(1/5)

### 参考文献

- ・高橋徹・小林昭彦「九州須恵器研究の課題」『古代文化』第42巻第4号 1990年
- ・三竹伸「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 1994年
- ・吉野勉久「古墳時代鉄鏃の編年」『九州考古学』第64号 1989年

# 図 版



下月隈島越遺跡より福岡空港を望む



(1) 調査地点全体 (北から)



(2) I区全景 (北から)



(1) III区全景 (西から)



(2) II区全景 (北から)



(1) I区 SB10 (北から)



(2) I区 左からSD02、05 (南から)



(3) I区 SD02土層 (南から)



(4) II区 左からSD02、03 (南から)



(5) II区 左からSD04、07、08、09 (南から)



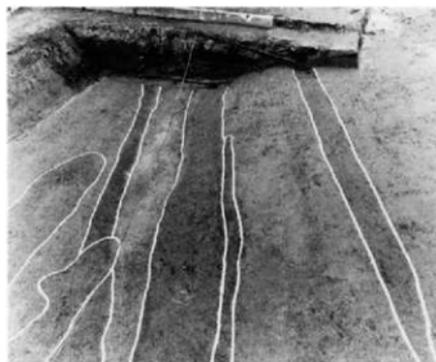
(6) II区 左からSD09・08、07、04 (北から)



(1) III区全景 (北から)



(2) III区全景 (東から)



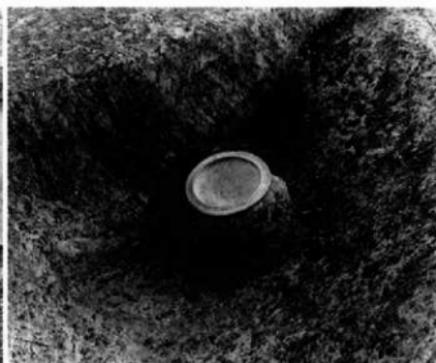
(3) III区溝検出状況 (南から)



(4) III区 左からSD01、02、04 (南から)



(5) III区 左からSD05、04、02、01 (北から)



(6) III区 SD01須恵器坏蓋出土状況



(1) 調査前状況 (南から)



(2) 伐採後状況 (東から)



(3) 墳丘遺存状況 (東から)



(4) 墳丘A群遺物出土状況 (北東から)



(5) 横穴式石室 (南東から)



(6) 横穴式石室奥壁 (南東から)



(1) 横穴式石室左側壁 (北東から)



(2) 横穴式石室右側壁 (南から)



(3) 小石室 (南西から)



(4) 小石室 (北西から)



(5) 小石室 (北東から)



(6) 小石室 (南東から)



(1) 小石室遺物出土状況 (南西から)



(2) 墳丘Aトレンチ土層 (南から)



(3) 墳丘Bトレンチ土層 (北西から)



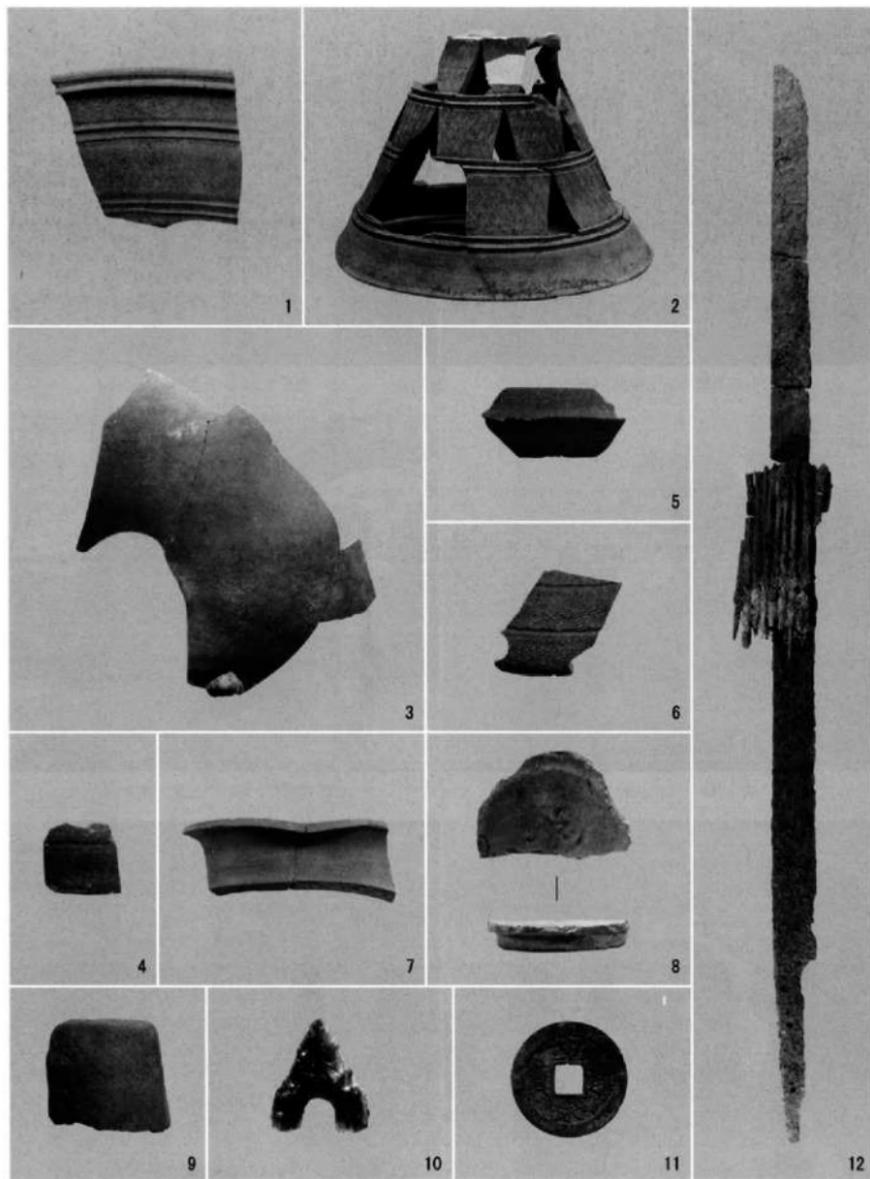
(4) 墳丘Cトレンチ土層 (東から)



(5) 横穴式石室廻り方 (南東から)



(6) 地山成形状況 (北西から)



水町古墳出土遺物

---

# 下月隈鳥越遺跡

—第1次・2次・3次調査報告—

# 水町古墳

—第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第755集

2003（平成15）年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区大神1丁目8番1号

印刷 魚住印刷  
福岡市博多区大博町8-20

---

# 付 図

## 下月隈鳥越遺跡

—第1次・2次・3次調査報告—

## 水町古墳

—第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第755集

